
平穏なる日々 Another-story

蒼い鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平穏なる日々 Another-story

【Zコード】

Z5312D

【作者名】

蒼い鳥

【あらすじ】

幼きころ、少年と少女は出会った。でも、その時から運命は決まつていたのかもしれない。時が立つにつれ彼（少年）と彼女（少女）の距離は開くが、ある日幼きころと似たような光景が広がり・・・

・

この小説は羽沢 将吾先生著書の
『それすらもただ平穏なる日々』 & 『それすらもまた、平穏なる日々』
(以下平穏なる日々と呼ばせていただきます)

の2次創作であり、本編とはあまり関係がございません。

この小説のことで羽沢 将吾先生に迷惑をかけることはござい遠慮を願
います。

なお、この小説は作者の自己満足に近い作品ですので評価はいただ
けでもコメントいたしません。

なお、この2次創作を作ることを許可してくださった、羽沢 将吾
先生に盛大な感謝を
この場をお借りしまして申し上げさせていただきます。

蒼い鳥

プロローグ（前書き）

これから平穏なる日々が続きますが、
一部本家とは違つ設定になりますがご了承ください。

プロローグ

シトシトと雨が降っていた。

静かな街路地のすみに小さな少女が傘も差さずに突っ立っていた。少女の着ているワンピースはすでにずぶぬれになつており、少女は大粒の涙を流しながら泣いていた。

時々、通りかかる大人は彼女を見ても、知らないふりをして通り過ぎていく。

さうに数分後、親とはぐれたのだろうか？

その年では至つて普通に見える少年が傘を差しながら少女の近くまでふらふら来了。

少年は少女を見つめていたが、我関せずと通り過ぎてゆく大人を見て彼は、よくわからないもやもやした気持ちになり、勇気を出して少女に近づいた。

・・・・・・・・・

近づいたはいいが何をすればいいか？わからず、戸惑つてしまつ。

少女は少年に気づかず泣いたままでいる。

少年は差している傘を少女に傾け濡れないようにした。

もちろん、少年は濡れるはめになつたが。

少女は冷たい雨の中で苦しそうに泣いていたが、自分に雨が当たつていないこと気に気がつくと近くに

少年がいてとても驚いてあっけにとられてしまつたようだ。

少年は濡れながら笑顔で言った。

「大丈夫？」

その一言で少女は何か不思議な気持ちになり思わず笑ってしまった。

「どうしたの？何で泣いているの？」

少年は聞かずにはいられなかつたようだ。

とたんに表情を曇らしながら少女はぼつぼつと話し始めた。「お父さんとお母さんの仲が悪くて、・・・のことこらない子だつて・・・とても悲しくなつて家から飛び出してきちゃつたんだ。」

少女の目にまた涙が浮かんできた。

少年はまずいと思つたのか話をそりそりとじて聞いた。

「・・・？」

「私の名前だよ。」はにかみながら教えてくれる少女。

「いい名前だね。」柄にもないことを言つてしまつたためか顔を赤くする少年。

「ありがとう。名前をほめられたの初めてだよ。あなたの名前は？」

「ボクの名前は・・・」

・・・・・・・・・・・・

それから建物の下に移動し兩宿りをしながらちよつとした話ををする。わかつたことは、年が同じで家の場所を教えてもらつたくらい。後は少年について難しい話係でちんぶんかんぶんのようだ。

あつと/or間に時間がすぎて少女は帰らなければならなくなつたようだ。

少年は名残惜しかつたのか思わず聞いた。

「今度遊ばない？」

「いいよ。家に遊びに来てね。」

少女は最後にそういうと少年そばによると

少年の唇と少女の唇が触れた。

少年は何されたのかわからずパニックに陥つてしまつたようだが、

少女は離れ

「お礼だよ。じゃ、またね。」

そういうながら去つていく。

少年はほを赤くしたままポーッとしていたが寒氣を感じてくると急いで帰つた。

余談だが、次の日に40度超える熱を出し倒れてつらにあつたのは言つまでもない。

・・・・・・・・・・

このときがたぶん少年の初恋になつたのだらう。

そしてそれは運命と呼べるだらうか？

この十数年後再び時が動き始める

運命1 新たな日々 - 前編 - (前書き)

のんびりとした話になるのはまだ先にならうです。
それまで少々お待ちください。

田覚ましがけたたましくなる。

彼はいつもどおり布団にもぐつたまま
ポチイ

田覚ましは今までに数えられないくらいの敗北をまた一つカウント
し鳴り止む。

彼、奈留概秀 17才にとつて田覚ましは無力に過ぎないようだ。

哀れ田覚まし時計。

すると、すでにそのことをわかつているかのじとく部屋へと入ってくる少女。

「シユウお兄ちゃん、起きないと学校遅れるよ。今日から学校統合で遠くなるんだから

早く起きないとダメだよ。」

シユウは忘れてたとばかりに起きた。

「そうだった。忘れてたよ。サリ」

「もう、まったく。シユウお兄ちゃんは。朝ごはん作ってるから早く降りてきてね。」

「了解。」

少女は、足立 沙里^{あだち サリ}は部屋から出て行く。サリはシユウの近所に住む幼馴染の足立 遥の妹で双子だ。

ちなみに双子の姉の足立 香奈^{かな}はかなりお気楽なやつで天然ボケの部類に入る。

妹のサリは責任感のあるまじめな性格だ。

双子でも性格は正反対に近いのは運命のいたずらなのだろうか?

2人あわせてカナサリと呼ばれている。

少し前までは遙が起こしに来てくれたが3年の先輩が付き合つてからうぞくでしょうがないので俺が断つたら、サリが来ることになった

とうわけだ。

サリは小学生6年生なのかと思えないほど家事が得意だ。特に料理であり将来まだ史上1人しかいない

三ツ星シェフにもなれるんじゃないかと思つぽぢす」。

「おつとやばい。早くしないと。」

準備してリビングに入りイスに座る。

「おはよう。サリ」

「おはよう。シユウお兄ちゃん」

いつもどおりの挨拶を終え、朝食をいただく。

「今日も朝からす」にな。

「えへへへ、今日もがんばりすぎちゃった。」

朝とは思えない料理をいただく。

「うん。おいしい。サリは将来立派なお嫁さんになるな。」

「もう、シユウお兄ちゃんたらほめても何もならないよ。」

顔を赤くするサリと殺し文句を平気で発言するシユウのいつもの会話である。

時刻は7時50分

「さて行くか。」

「うん。」

いつもなら8時に出ても間に合つたのが学業カリキュラム変更のためシユウの通つている

桜ヶ丘学園と聖嬢学園が統合することになりちょっと遠くなつたのだ。

名前は聖嬢桜ヶ丘学園と何のひねりもない。頭の堅い人たちが決めた名前だ。

どちらも私立学園だが試験校として国から補助が出しているので公立校と同じくらいの学費で勉強でき、施設などがかなり充実しているためかなりの人気校だつたのだが、

公立でも近年いろいろな問題などで私立に劣らない学業成績になつてきたので

お互いの学園で使用しているカリキュラムを変更し生徒たちの学業成績を上げるのが目的らしい。

サリと一緒にマンションを出る。小さなマンションであるが設備がよくかなり高いらしいのだが

事故で死んだ親がコネだけはなぜか無駄にあり、死んだときに遺産相続や保護施設に入らなければならないことなどをすべて処理してくれたのは本当にありがたかった。

その人が一人で住むならこのマンションを格安で譲ってくれたのだ。今はバイトしながら安定した生活をしている。

「じゃ、私はこっちから学校行くね。」

「ああ。」

サリは笑顔で走っていく。思うのだがおばさん。かわいい娘をなんに放置して大丈夫なのですか？

自転車に乗りゅうくりと行く。30分くらいで丘の上に学校が見えてくる。

そこが聖嬢桜ヶ丘学園だ。一番の不満は統合して新しい学校を作ることはいいのだが
なにゆえまた、丘の上に学校を作ることはどういうことだといつた
い。

理事会はそんなにくだらけなのか？と疑いたくなる。
自転車組にとつて朝はかなりきついことこの上ない。
徒步組を恨めしそうに見ながらのぼり無事到着。

自転車を置きクラス分けの掲示板に行こうとするが、人だからが多くてみるとおろか近づくことすらできない。

人だからの中には見慣れた桜ヶ丘学園の制服を見るが、それ以外の見慣れない制服はどうも聖嬢学園の制服らしい。

「おお～い。」

声のするほうを見ると中学時代から仲の良い深見 幸一だ。

「よお。人だかりでどこのクラスわからないんだが・・・

思わず不満を漏らしてしまつ。

「安心しろ。俺とシユウはC組だ。」

「気が利くな。サンキュー」

「気にするな。」

いつもと同じような会話をしき組に向かう。

C組の扉を開くと中では学園問わざいろいろな人が話していた。シユウと深見は後ろの席に適当に座る。席の順番を自由。

「あれ？ 深見、あやつはどこ行つた？」

「ん？ あやつって誰だっけ？」

「ほら、俺とお前ともう一人いたじゃないか。」

「ああ、Yかあ～」

「ん、な訳あるかあ～。」

激しいツッコミが一人を襲う。周りは何かと見つめてくる。二人は他人のふりを決め込んだ。

「ちょっと無視かよ。ねえ～、ねえ～ってば。・・・・・・・・・・ごめんよ～」

このじうじょうもない弱者に見えるアホが一人の言つあやつであり名前を飛閃 ひせん コイ 優衣である。念のため説明するが男である。

シユウ「つたく。本当にお前はイタイな。」

深見「俺らの友だと“う”ことが恥ずかしくて仕方ないよ。」

ユイ「うう、悪かったよ。」

二人は言いたい放題である。いつもいじられるのは彼のスタンスである。

シユウ「で、何のようだ？ Y」

ユイ「だから、Yつていうな～」

大絶叫するユイ。周りは怪しい三人組に我関せずと知らないふり。

シユウ「わかつたよ。なんだよ、ユイちゃん」

コイ「その名で呼ぶな」

深見「どちらでもいいだろ。」

深見に一撃必殺クラスの手刀がコイのみぞおちに華麗にヒット。
もだえるコイ。彼はやはりこういうキャラである。

シユウ「最後のチャンスだ。聞くぞ。何のよつだ?。優衣ちゃん」

コイ「だから俺はその名で・・・」

とそこでシユウの顔を見て口を閉じる。周りは男が『優衣ちゃん』
と連呼するのでなにやらここそこ話を始めている。

コイ「あうっ~」

うなだれるコイ。

シユウ「お前はそういうキャラなんだよ。」

深見「激しく同意。」

コイ「だから毎回言つてるだろ。母親が美少女趣味で男でもかわい
ければいいみたいな考え方の持ち主だつて。」

シユウ「安心しろ。その辺は理解してるよ。」

深見「いえ~」

コイ「お前らがどうも信じられんのだが・・・」

これはもちろんいつものやりとりである。

・・・・・・・・・・

悪友三人組は桜ヶ丘学園時代に学校でかなりの知名度（悪い意味）
で知られ、近隣の学校でもかなり警戒されていた。

周りの工業高校の不良どもですら、三人組の名前を聞くとかなりお
びえるらしい。

メンバー1 シュウ 親のコネの関係もあり政府のお偉いさんや危
ない職業の人とかなりの人脈を持つ。親から教えられた武術は無流
という型が戦闘によつて変わるというめちゃくちゃなモノ。そのた
め戦闘を実際体験。主に乱戦が得意。

メンバー2 深見 野球部のエースだが、かなりのう。中学校時代は先生からも恐れられる問題児だった。シユウと出会うことにより変わった。だが、いまだに力は健在。しかし、本領は相手の戦略を見切るなどの戦術家。

メンバー3 ュイ はつきり言って力は喧嘩に関しては無力。とうより喧嘩の戦い方がわからないというほうが正しい。事前に相手の情報を得たり相手の弱みを握つたりと情報戦専門。

この三人組はかなりの問題児である。外見は優しく、普段はやさしいが。いたずらなどに関しては異常なまでの才能を發揮する。

・・・・・・・・・・・・

そこでいきなり怒声が鳴り響く。

「飛閃！！理事会に盗聴器を仕掛けるとはどういうことだあああ！」

教室に怒鳴りながら入ってくるのは、元桜ヶ丘学園の教師尾尻一徹おじりだ。

ユイ「やべっ！！見つかるとは思わなかつたわ。シユウ、深見、後は頼むわ」

シユウ「ああ、がんばれ」

深見「俺は知らない。」

一人の声を聞くと泣きながら尾尻の入つてくるドアと反対側のドアへ行き逃げるユイ。

「までえ～。今日こそ逃がすか～」

死ぬ氣で追いかける教師はまるで嵐のようだ。

周りは何が起こったのか理解できず呆然としていた。だが、すぐに三人組を知る桜ヶ丘学園の生徒は聖嬢学園の生徒に説明し、いつも空気に戻っていく。

深見「んじゃ、俺はちょっと出かけてくるわ。始業式でなんかいわれといたら頼む。」

シユウ「了解。」

シユウは一人になるとかばんから親が残した無流の武術辞典を読み始める。

何せ戦闘の状況によつて型を変えるという技なため、覚える数が半端ないためだ。

シユウの場合はすべて覚えているのだが、使わない状況などが良くあるため忘れないために口ごもから読み直してゐるわけである。
そんなかんだで、先生が入ってきて悪友二人がいない状況でホームルームがスタートした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5312d/>

平穏なる日々 Another-story

2010年10月11日02時22分発行